

日本学術会議 国際対応分科会 自己点検報告書

国際対応分科会(小委員会)名 国際サイエンスデータ分科 更新日 2012/7/17
(2009/05/01の形式)

国際学術団体に関する事項

国際学術団体名

(和文) 国際科学技術データ委員会
(欧文) Committee on Data for Science and Technology
(略称) CODATA

日本学術会議加入年(西暦) 1966 年

運営組織の名称・役員の構成等

運営組織の名称(欧文) CODATA Officers & Executive Committee

	会長	会長代理/次期会長	副会長	事務局長
(氏名)	Huadong Guo	五條堀 隆(副会長)	F.Kuznetsov(副会長)	Bob Chen
(国)	中国	日本	ロシア	アメリカ

役員選出方法の概要(120文字程度で記載)

加盟国や加盟学術団体から推薦委員会に候補者を推薦し、総会で投票により選出する。

加入国・地域の数 20 ケ国

主要加入国(10ヶ国程度を列举)

米、日、英、仏、独、中、印、韓、カナダ、アイルランド、ロシア、ウクライナ、ポーランド、イスラエル、南アフリカなど

国際学術団体のホームページURL <http://www.codata.org/>

国際学術団体の年間運営経費 328500 US\$(2008)

日本の分担予定額[事務局で記入] 3,242千円(2012年度)

国際学術団体の活動状況

総会・学術研究集会の開催状況(過去10年間・開催年の新しいものから順に5件まで記載)

開催年 (西暦)	会議の名称	開催地	参加者数	日本からの 参加者数	学術会議共催 /協賛の有無
2011年	The 1st ICSU World Data System conference	日本 京都	300人	50人	無
2010年	CODATA 総会および国際会 議	南アフリカ ケープタウン市	450人	30人	無
2008年	CODATA 総会および国際会 議	ウクライナ キエフ市	450人	30人	無
2006年	CODATA 総会および国際会 議	中国 北京市	700人	60人	無
2004年	CODATA 総会および国際会 議	ドイツ国 ベルリン市	260人	20人	無

運営に関する会議の開催状況(過去10年間・開催年の新しいものから順に5件まで記載)

開催年 (西暦)	会議の名称	開催場所 (機関等)	参加国数	日本からの 代表者名	学術会議の 代表派遣数
2010年	CODATA総会	南アフリカ ケープタウン市	16	五條堀 孝	1
2008年	CODATA総会	ウクライナ国 キエフ市	16	長島 昭	1
2006年	CODATA総会	中国 北京市	20	長島 昭	1
2004年	CODATA総会	ドイツ国 ベルリン市	20	長島 昭	1
2002年	CODATA総会	カナダ国 モントリオール市	20	次田 皓	1

出版物等(主要な定期刊行物・不定期刊行物を刊行頻度とともに箇条書きで記載)

- | | | |
|---|----------|-----------------------------|
| 1 | 定期的(年 回) | 主な出版物名 Data Science Journal |
| 2 | 不定期(年数回) | 主な出版物名 Springer Monograph |

活動状況(各項目につき過去5年間の状況を120文字以内で記載)

<p style="text-align: center;">国際機関等の提唱で行った活動</p> <p>国連情報社会サミットWSIS(2003年ジュネーブ、2005年チュニス)での発言と活動、すなわち学術データの公共財としての共有と活用による情報格差の解消に関する提言のフォローアップとしてデータの公共財化の活動を展開している他、データを基軸にしたData Intensive/Centric Science、Open Access等を通して複数の学術分野との連携を展開している。</p>
<p style="text-align: center;">国際機関等への提言等</p> <p>学術データのOpen Accessについて、ICSUおよびその関連組織・委員会やGEOSS、GEOと連携した活動を展開している他、ISOおよびOECDと協力してナノテク標準を検討するための会議を企画中である。</p>
<p style="text-align: center;">国際事業等への参加・実施等</p> <p>学術情報の共有と活用を通じた情報格差の解消に向けてBISO-BRDI-CFRS International Symposium on the Case for International Scientific Data Sharing: A Focus on Developing Countriesを2011年4月に米国ワシントンで開催した。</p>
<p style="text-align: center;">全世界的/地域的研究課題への取組み</p> <p>学術情報のオープンアクセスのための枠組み作り。GICSI(Global Information Commons for Science Initiative)をまとめ普及、具体化を推進中。環境および核エネルギーに関してのデータ活動のありかたについても検討を開始している。</p>
<p style="text-align: center;">発展途上国への対応</p> <p>アジアオセアニアのデータソースネットワーク構築。Data Science JournalをCODATAからの資金で運用し、投稿料がないため、中国、インド、アフリカなどからの投稿が増えている。</p>

関連学術分野の動向と今後の重要課題(120文字以内で記載)

<p>学術情報のオープンアクセスのインプリメンテーション、GICSIの応用として環境ビジネスの設計。</p>
--

国内における国際学術団体への対応状況

国際学術団体の役員就任状況(過去10年間・新しいものから遡って5件まで記載)

国際学術団体における 役職名	氏名	任期	
		開始年	終了年
Vice President	五條堀 孝	2010	2014
Executive Committee Member	濱口 宏夫	2010	2012
Executive Committee Member	五條堀 孝	2008	2010
Past President/Nominating Committee Chair	岩田 修一	2006	2010
President	岩田 修一	2002	2004

学術会議の国際対応分科会(小委員会)名 国際サイエンスデータ分科会

学術会議以外の国内対応組織・委員会等

情報知識学会・CODATA部会

国内の関連学協会等の状況(主要なもの5件まで記載)

学協会の名称	会員数	学協会のホームページURL
情報知識学会	300	http://www.jsik.jp

学術会議の国際対応分科会(小委員会)の活動状況

学術会議の国際対応分科会(小委員会)名	国際サイエンスデータ分科会
所属分野別委員会	情報学委員会

分科会(小委員会)の構成

委員長	副委員長	幹事	
岩田 修一	五條堀 孝	中西 友子	

会員数	連携会員数	特任連携会員数
1	10	1

分科会(小委員会)の活動方針(箇条書きで120文字以内で記載)

CODATA、WDSへの日本からの情報発信力の強化。各種分野における大規模情報の取り扱い方や標準化・規格化などについての国際連携。災害時などの危機対策における学術情報の活用・発信・交換などの国際協調についての議論と方策の提案。

今期の会議開催状況(開催日時の新しいものから遡って6回まで記載)

会議開催日時 (2009/05/01の形式)	主な審議事項・議題等
2012/3/9	「国際サイエンスデータ分科会」第2回分科会(第22期) ・ e Scienceデータ中心分科会との連携について ・ 第1回WDS小委員会の開催について
2012/1/18	「国際サイエンスデータ分科会」第1回分科会(第22期) ・ 委員長の互選 ・ CODATA小委員会/WDS小委員会の体制について
2007/3/4	「国際サイエンスデータ分科会」第4回分科会 ・ WDSについて ・ CODATAについて
2006/2/23	「国際サイエンスデータ分科会」第3回分科会 ・ ICSU/SCCIDについて ・ WDCとWDS、WDSSCについて(学術会議の役割) ・ CODATAの役員候補推薦案について
2005/9/8	「国際サイエンスデータ分科会」第2回分科会 ・ 第21期での活動について ・ 分科会からの提言・提案などについて
2005/6/30	「国際サイエンスデータ分科会」第1回幹事会 ・ 海外情勢の検討について

日本における国際学術団体の活動の周知・広報の状況(箇条書きで120文字以内で記述)

1. IGY+50国際シンポジウム(2008年つくば市開催)のプロシーディングをCODATA/Data Science Journalから公開 2. 学術の動向2009年5月号での報告「CODATAの活動と展望について(岩田修一)」 3. 学術の動向2005年12月号での報告「科学技術データとオープンアクセス(岩田修一)」 4. 日本学術会議声明「データベースに関して提案されている独自の権利(sui generis right)についての見解(2001/10/17)」 5. 2012年5月地球惑星連合講演会でのWDS関連セッションU-01 Toward a New Framework of Global Data Activityを共催、6. 学術の動向の6月号WDS特集号への関係者の寄稿、7. 情報管理7月号にWDS開所式報告。

国際対応における国内学協会との連携状況(箇条書きで120文字以内で記述)

(1) 情報知識学会やその他情報関連学会と連携し、国際会議へのセッション提案や国内活動への多面的な呼びかけをしている。また、日本学術会議WDC小委員会に国沢隆がICSU/WDSとCODATA間のリエゾンとして参加している。(2) CODATA TGとしてはExchangeable Materials Data Representation to support Scientific Research and Education、DSAO(Data Sources for Asian and Oceanic Countries)での主導的な活動、「アジア地域のための情報コモンスの制度設計」のアジア学術会議への提案、参加、日米ワークショップ「グローバルな科学技術情報コモンスによるイノベーションの創出」の開催などがある。

特記事項・国際委員会による指摘事項等への対応状況(箇条書きで120文字以内で記述)

分科会の構成員に関して、分野、年齢、地域、組織、男女などの適正なバランスに配慮しながら、日本が国際的に果たすべき役割、将来的な活動を視野に入れて科学技術データ活動の専門家ネットワークの拡充に努めている。

分科会・小委員会活動の自己評価等(箇条書きで120文字以内で記述)

(1) 関係者の努力の積み重ねと継続で国際的な役割を果たしてきた。(2) 地球規模の本格的な情報社会が到来した今、データ活動の重要性はより一層高くなっており、国内の体制の拡充と国際展開について真剣に検討すべき時期であるとの認識し、第22期には、WDS小委員会、CODATA小委員会を立ち上げ、活動の幅を拡大しつつある。